

浪江の こころ通信

・第51号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム※が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第51号」への
感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





安倍 久子さん(棚塩)

取材者：浪江町復興支援員 富川・土田 / 関西浜通り交流会 山内
取材日：7月19日

生け花によって救われた私の命



▲いけばな展に出展した久子さんの作品

震災前は、浪江町の幾世橋長寿学級の学級長さんをされていた安倍さん。富山市に避難後、数々の苦難に遭いながらも家族とともに乗り越えられ、現在は、好きな華道を通して支えてくださる方々と共に充実した日々を送っていらっしゃいます。

■避難先を求めて…たどり着いたのが富山市
夫と息子とともに避難所を探しましたが、どこも満員でした。富山市の街は明るく、ガソリンスタンドやコンビニも開いており、物資もたくさんあって別世界に見えました。当時、放射能の風評被害がひどかった時にも富山の皆さんはとても温かく接してくれ、ホテルにも宿泊させてもらい、市役所で紹介されたマンションの社長さんは笑顔で受け入れてくださいました。その後、別々に避難していた娘も今のマンションで一緒に住むことになり、震災で傷ついていた心と体を癒していました。そんな矢先、娘が病で倒れたり、義母が亡くなったり、夫が入院したりなどいろいろなことが重なりました。幸い娘も夫も大事には至らなかつたものの、私自身も一気に体重が減り、心身ともにとても辛い生活で、何事にも意欲がなくなり、寝込む日々でした。

■華道が、人とのつながりを、私に生きる元気をくれました
そんな時、富山市で花展がありました。そんな時、家族に支えられ、やっとなの思いで会場にたどり着き、数々の作品の中、いわき支部で学んだ龍生派の作品がありました。それを見た時に懐かしさで涙があふれました。震災があっても変わらないものがそこにはありました。会場を後にするときに、娘の肩に寄り添いながらではなく、私一人でシャンとして歩いていることに気づき、私も家族もびっくりしました。富島の懐かしいいわき支部での思い出と生け花が私に力をくれたのだと思います。
何度か花展を見に行くうちに龍生派富山支部の支部長さんと会うようになりました。支部長さんは明るく朗らかな方で華道に熱い情熱を持っておられ、「安倍さん、生け花を続けなさい。お花のはさみは、絶対に置かないように。そして頑張ってくださいませよ」と熱心に声をかけてくださり、龍生派本部からも花器などの支援もあり、私は永年取り組んでいた華道を再開する機会をいただいたのです。
そして、支部長さんや支部の皆さんとともに花を生け、交流する中で富山の良いところをたくさん知ることができました。また、富島の良いところもたくさん話をしたり、悩みを聞いてもらったりと、富山でもたくさんのお友達ができました。体調も良くなり、先日、いけばな展に出展すること

ができました。
震災がなかったら、このような苦労も味わわず、浪江で元気に楽しく過ごしていたはずですが、富山に避難したおかげで本当に困っている人に対する無償の愛、思いやり、励ましに接することができ、生きる力をいただきました。
■小さな一歩でも、諦めないで前に進むこと
震災前は、幾世橋長寿学級や女性友の会、陶芸教室、絵画教室、華道教室などを通して、たくさんの方とのつながりがあり、忙しいながらも充実した日々を送っていました。長寿学級では、まだ2年目の私を学級長に選んでいただき、皆さんには大変お世話になりました。ただ、あの日に境に会うことができなくなり、その後の皆さんのことがとても気がかりです。この機会に皆さんがそれぞれの地域でお元気に過ごされていることを願っています。また、富山市内での四季折々に咲く花や景色を見るにつけ、遠く離れた浪江のことを懐かしく思い出し、ふと寂しくなる時がありますが、こうして自分が今、辛かった日々を乗り越えて、好きなお花を続けられることに感謝をしています。
辛いこと、悲しいこと、思い通りにならないことは誰にでもあると思います。でもどんなに小さな一歩でも諦めることなく、頑張る前に進むことの大切さをメッセージとしてお伝えたいと思います。



阿部 秀男さん(川添)

取材者：特定非営利活動法人おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永
取材日：7月6日

福島に帰ることにしたよ。だって、故郷だからさ



▲大好きな穴道湖の見えるお店で
▼枕木山の頂上から見た風景（「なみえ新聞」への投稿より）



震災の日には島根でお仕事をされていた阿部さん。「驚いて、とにかく行ける所まででいいから、行きたかった」
あの日から4年が過ぎた今、「そろそろ、落ち着きたいと思って」ここ島根から郡山市に引越しを決意されました。

■島根での暮らし
最初に来たのは30年くらい前。仕事の関係でね。ここ福島、そして全国の現場を行ったり来たりしてたけど、2012年の12月に仕事を辞めて、島根でアパート暮らしを始めた。あちこちを転々としていたので、とりあえず住むなら島根がいいと思ったから。以前の仕事仲間が家電製品は揃えてもらい、行ったらすぐ住めるようにしてもらった。
実際に住んでみると、全てがうまくいくわけではないけど

■あの日からのこと
3月11日の5時くらいかな。事務所に上がったら、「東北で大きな地震」と聞いて、とにかく帰ろうと思っていろいろ調べたんだけども、とても帰れる状況じゃなかった。一晩中、気が気じゃなくて、ようやく姉と連絡が取れて、その大変さを聞いた。翌年、グチャグチャになった浪江の家の中を初めて見て、「何だこりゃ!」と思った。道路や街並みもひどくて、もうこの町はダメだな、と。その後、2か月に1回くらい浪江に戻ってるけど、徐々に徐々に復旧してるのを見て、「本気で

■これからのこと
若い時からずっと、仕事で日本中を転々としていたから、福島に戻っても昔の知り合いは：どうかな。
戻ったら、まずは、新しい道をたくさん覚えようと思って。郡山でも走るよ。いい場所があったんだ。ポケっとしてられないよ。

ね。でも、それはどこに住んでもそうだと思う。
穴道湖の夕焼けの風景が好き。近辺の風景写真を撮って、「なみえ新聞」に投稿してるよ。恥ずかしいからペンネームで。
今は週に3〜4回、10kmくらいは走ってるよ。仕事辞めて時間はあるし、周りを見たら走ってる人が沢山いたので、じゃ、自分もやってみようと思って。最初の頃は500mでだめだったけど、だんだん慣れてきた。

■故郷への思い
震災から4年近くが過ぎて、去年の暮れかな、そろそろ落ち着こうと思って土地を買った。郡山市にしたのは、なんとなく気持ちだけ、大前提は福島県内。
だって、故郷だからさ。
ゆくゆく浪江に帰れる日が来たら、郡山に買った土地を売って、戻るかもしれない。戻ったとしても、両隣には誰も住んでいないかもしれないけど。本当にそんな日が来るのか、今は、想像がつかないけど、やっぱり、帰りたい思いはあるんだよ。



中里より子さん(井手)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：7月9日

仕事は生きがい。 お客様から元気をもらっています！

震災前は、サンプラザ前の黄色い店舗「ビューティサロン中里」を経営していた中里さん。

先の4月1日に郡山市大槻町に「ヘア&メイク中里」をオープンされました。郡山に住む娘さんも美容院を手伝って、新たな一歩を踏み出しました。



▲開店したお店の前で (郡山市大槻町)

■4月1日に新店舗をオープン
震災後は、津島・川俣と避難して、そして福島市で3年間過ごしました。その後、新たな暮らしの拠点を探して、2014年12月29日に郡山市に引っ越しすることができました。住んでからまだ半年。近所の方とはまだまだなじめておらず、どうお付き合いしていくか模索中です。お店も開店したばかり。近隣は静かな住宅街なので近くからのお客様は少ないですが、少しずつ知っていただけたらと思います。

■福島市・二本松市の仮設の店舗でも営業継続中
郡山に店舗を開いたとは言っ

■順調だった浪江でのお店
浪江でお店を構えてから27年経ちますが、新築店舗に移転して8年目で震災にあいました。子どもから中高年の方まで様々な年齢の方が来店していただき、親しく和気あいあいと営業させていただきました。振り返れば、お客様に恵まれていたな、と思います。震災時は、まだ美容院の建築費の借金も残っていたので再建するのが大変でした。でも、浪江の美容組合員として仮設店舗で営業できるようになってから、自分の元気の源は仕事だな、とつくづく感じました。仕事が無かったら病気になる

■落ち着いた日々を願って
以前は、浪江で親しくさせていただいた仲間や知人と、利尻島や黒部、安達太良、栗駒などの山に登りに出かけた時、沖縄や北海道などへ旅行したものです。私は出歩くのが好きで、休みの日はよく外出していました。でも、今は仕事で忙しく、親族の介護などもありますからまとまって休みを取ることが難しい状況です。この郡山の店舗兼自宅を準備するにも2年ほどかかりバタバタ過ぎてしまいました。今後、状況が落ち着いて休みが取れるようになったらまた出かけたな、と思っています。

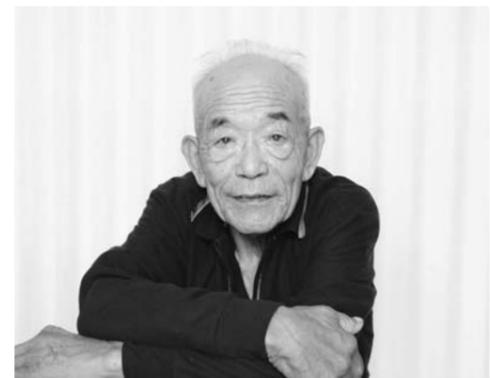


遠藤 春男さん(田尻)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：7月14日

孫と一緒にいられることが、 今の一番の幸せです

震災前は、妻と次男夫婦と孫3人、7人で一緒に暮らしていましたが、現在は遠藤さんご夫婦と次男ご家族は別々です。しかし、車で10分程度離れた同じ本宮市内に住み、遠藤さんは互いの家を行ったり来たりしながら、お孫さんたちと一緒に時間をとても大切にしておられます。



▲「まだ笑えないなあ」と呟きながら。本当ですね。

■大地震を2度経験したことになります
3月11日のあの日は、妻も次男夫婦も働きに出ていて、私と孫2人だけが家にいました。私の凄惨な揺れに、孫を抱えて車に逃げ込み、安全と思われるところまで移動しました。屋根の瓦はひっきりなしに飛んでくるし、犬は吠え続けるし、とにかく凄惨な状況でしたが、何よりも家族の誰にも連絡が取れないことが心配でなりません。少し落ち着いてからは、隣近所のガス栓を閉めて回りまわした。その日の夜は電気もガスも通じなかつたので、発電機で電気を起こし、水は沢へ汲みに行

■今はやるのがないんです
私は大型自動車の運転手やトネル掘りなどの仕事をして、やっとなんか自適になったかと思ったら、この避難です。浪江にいた頃は、川に釣りに行ったり、茸を採ったり、鉄砲撃ちもしていたけれど、そんなことをして遊ぶこともできません。近所に住む2番目の孫が釣り好きで、今度、夏井川渓谷に行こうと思っていますが、ここから1時間もかかるんですよ。若い頃と違って遠く感じます。避難したばかりの時には2、

■孫たちに何を遺せばいいのでしょうか
でも、孫たちは不憫ですよ、生まれた浪江を知らないのですから。私も孫たちに対して「ここが小学校だったんだよ」「この川に魚がいたんだよ」などと伝えることもできません。地震なら諦めもつきます。だけど、何十年か過ぎて帰ることができたとしても「原発はもう大丈夫」なんて言えるのでしょうか。余計に不安になる時がありますよ。